



Title	日本語の助数詞について : 分類の再考と基本概念
Author(s)	岸田, 泰浩
Citation	日本語・日本文化. 1997, 23, p. 13-37
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12875
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

<研究論文>

日本語の助数詞について

— 分類の再考と基本概念 —

岸田泰浩

1. はじめに

モノを数える時などに数詞とともに用いられる助数詞は、日本語学習に際し教える側にとっても学ぶ側にとっても面倒な項目のひとつであろう。まず、学習者は、ある助数詞がどのような対象物に対して適用されるか、逆から言えば、ある対象物を数える時にどの助数詞を使うかを個々に記憶していかなければならない。ただこれは、言ってみれば、単語を覚えていくということに他ならず、ふつうの単語の時と変わらないが、助数詞などに関してはその「意味」を簡潔に説明できるとは限らないのが難点のひとつではある。さらに、助数詞の形態的側面については、数詞との組み合わせにおいて「読み」が変わるという難点もある。助数詞を導入する度に数詞と組んだ読みを列挙するだけでは、いかにもその読みの変化が乱雑であるかのような印象を与え、数詞ごとに逐一記憶するしかないのだと学習者が思いこんでも不思議ではない（もっとも、習得語彙の増加にともなって、変化のパターンを発見することもあるだろうが）。しかし、この読みの変化は、全く恣意的であるわけではなく、小さな異なりを度外視すればパターン化できるにもかかわらず、その規則的特徴が日本語の教科書や学習書の中で十分明確な形で提示されているとは言い難い¹⁾。

本稿では、このような現状を考慮し、日本語助数詞の形態について、変化のパターンが把握されやすいように体系付けられ、かつ、実用にも耐えるような分類を示す。さらに、読みの変化に比べ、すぐに目に付くようなものではないためか、あまり注目されることがない助数詞の基本的な概念の区別について考察し、それがいくつかの文法事項と関わっているために無視できないものであることについても触れる。

2. 助数詞の形態的分類

助数詞の形態において厄介なのが、数詞と組合わさった場合、助数詞と数詞の片方ないしは両方に異形態、つまり、基本とは異なる読みが現れることである。学習の初期段階では、無条件に覚えることが肝要だろうが、この異形態の分布には規則性があり、その基本的なパターンの数も限られていると言ってよい。ただし、現実には、さまざまな「揺れ」が観察されており、個々の助数詞がどのタイプであるかを特定するのは必ずしも容易ではない²⁾。本節では、多少の揺れをあえて考慮せず、助数詞の形態変化の潜在的な体系を、タイプ間の特徴の相違が把握できるような分類名を冠して提示していく。そして、この分類は、日本語教育の面からも役立つタイプ分けを提供するものであると考える。

2. 1 数詞の系列

最初に、助数詞の分類にも関わってくる、数詞の分類について述べておかなければならない。数詞は、漢語系と和語系の2系列に分かれる。

(1) a. 漢語系

いち、に、さん、し、ご、ろく、しち、はち、きゅう／く、じゅう…

b. 和語系

ひと、ふた、み、よ、いつ、む、なな、や、ここの、とお (...)

現代日本語では、和語系の数詞は、いくつかの例を除き11以上の数には使われない。また、漢語系の四と七は、和語系の数詞に取って代わられることが多い³⁾。特に四の場合は、漢語系の読みが使われる表現は限られている。従って、次のようなものも漢語系として認められ、(2) a. については、むしろこちらの方が(1) a. よりも漢語系として一般的である。

(2) a.さん、よん、ご

b.ご、ろく、なな

助数詞は、まずどちらの系列の数詞とともに使用されるかで2つのグループに大別される。もっとも、和語系数数詞と組む助数詞でも、11以上の数詞では一般的に漢語系数数詞が使われる。最初に、大部分の助数詞が含まれる漢語系数数詞との組み合わせにおいて、どのような読みの変化があるかを、分類を示しながら

らみていく。

2. 2 漢語系数詞と組む助数詞

助数詞自体にも漢語・和語・外来語という由来の異なるものがある。漢語起源の助数詞の多くは、漢語系数詞と組むが、この類の助数詞にとって重要なのは、異形態がどのような分布で現れるかである。

まず、第1の種類として、数詞も助数詞も基本の読みのままで異形態が使われないものが挙げられる。

(3) タイプC1: 基本の読みのまま⁴⁾

いちまい (枚)	いちだい (台)	いちリットル
にまい	にだい	にリットル
さんまい	さんだい	さんリットル
よ(ん)まい	よんだい	よんリットル
ごまい	ごだい	ごリットル
ろくまい	ろくだい	ろくリットル
ななまい	ななだい	ななリットル
はちまい	はちだい	はちリットル
きゅうまい	きゅうだい	きゅうリットル
じゅうまい	じゅうだい	じゅうリットル
ひゃくまい	ひゃくだい	ひゃくリットル
せんまい	せんだい	せんリットル

七は、「しち」も一般的である⁵⁾。四は、「よん」に加え「よ」という読みも用いられる場合がある。なかには前者よりも後者が普通の読みの助数詞があり、この種の助数詞をC1'と呼ぶことにする。

(4) タイプC1': 「よ」が一般的

いちねん (年)	いちえん (円)
にねん	にえん
さんねん	さんえん
<u>よ</u> ねん	<u>よ</u> えん

ごねん

ごえん

⋮

⋮

また、九のもう一つの読みである「く」はあまり用いられず、「きゅう」が一般的であるが、中には「く」が併用されるものやそれが唯一許される読みであるものがある。

(5) a. よにん (四人)、く／きゅうにん (九人) ; よじ (四時)、くじ (九時)

b. しがつ (4月)、しちがつ (7月)、くがつ (9月)

(5) a. のような助数詞は、(5) b. とともに慣用表現として変則的な読みを持つと考え、特に独立したタイプとしない。

C1型は、数詞の読みが慣用的に固定されているものを除き、特に問題とならない。問題は、数詞が助数詞と組合わさると、片方または両方に異形態が現れる場合である。個々の助数詞ごとにこの組合せの読みを単に列挙するだけでは、その背後にある「型」がなかなか見えてこない。たしかに現実の使用においては、話者や同じ型であるはずの助数詞間で読みの許容度が異なるが、だからといって、潜在的に存在すると思われる助数詞の原則的分類が無意味であることにはならない。以下のタイプ分けは、異形態の出現するパターンをいくつかの特徴を段階的に適用して得られるものであり、それは、助数詞の形態変化の体系の概観を明示化したものでもある。

第一に、数詞のみに異形態が使われ、助数詞が不変であるタイプが認められる。これはどの数詞の読みが変わるかで2つに下位分類される。

(6) タイプ C2: 数詞の読みが変わる⁶⁾

a) いっさつ (冊)	いっとう (頭)	いっトン
にさつ	にとう	にトン
さんさつ	さんとう	さんトン
よんさつ	よんとう	よんトン
ごさつ	ごとう	ごトン
ろくさつ	ろくとう	ろくトン
ななさつ	ななとう	ななトン
はっさつ	はっとう	はっ／はちトン

きゅうさつ	きゅうとう	きゅうトン
<u>じゅっ</u> さつ	<u>じゅっ</u> とう	じゅっトン
ひゃくさつ	ひゃくとう	ひゃくトン
せんさつ	せんとう	せんトン
b) <u>いっ</u> こ (個)	<u>いっ</u> かい (回)	<u>いち</u> キロ
にこ	にかい	にキロ
さんこ	さんかい	さんキロ
よんこ	よんかい	よんキロ
ごこ	ごかい	ごキロ
<u>ろっ</u> こ	<u>ろっ</u> かい	ろっキロ
ななこ	ななかい	ななキロ
<u>はっ</u> こ／はちこ	<u>はっ</u> かい／はちかい	はち／ <u>はっ</u> キロ
きゅうこ	きゅうかい	きゅうキロ
<u>じゅっ</u> こ	<u>じゅっ</u> かい	<u>じゅっ</u> キロ
<u>ひゃっ</u> こ	<u>ひゃっ</u> かい	<u>ひゃっ</u> キロ
せんこ	せんかい	せんキロ

C2aとC2bのタイプに共通しているのは、一部の数詞が促音化して読まれることである。この2つの下位タイプが異なるのは、後者が一／八（つまり「ち」で終わる⁷⁾）と十に加え、六／百（つまり「く」で終わる）の数詞も促音化する点である。また、C2bにおいては促音化していない八の読みも可能である。

各々のタイプは、助数詞の初頭音によって特徴づけられる。C2aには/s-/または/t-/で始まる助数詞が、C2bには/k-/で始まる助数詞が属する。これらには外来語由来の助数詞も含まれる。ただし、外来語の助数詞では、十以外の数詞において促音化しない読みも聞かれる。特に/k-/で始まる外来語助数詞では、数詞一が促音化しないほうが一般的である⁸⁾。この点を喚起させるために「キロ」などは、C2b'として部分的にC2bと異なるタイプとして別扱いしよう。

(7) いっ／いちセット (C2a) いちカロリー (C2b')

⋮

⋮

ろくセット

ろっ／ろくカロリー

⋮	⋮
はっ／はちセット	はち／はっカロリー
じゅっセット	じゅっカロリー
ひゃくセット	ひゃく／ひゃっカロリー

助数詞の読みが不変で数詞だけに読みの変化が現れる C2 型には次のようなタイプもある。

(8) C2c: 十のみが促音化する (平方～)

いちフラン	いちフィート	いちへいほう
にフラン	にフィート	にへいほう
さんフラン	さんフィート	さんへいほう
よんフラン	よんフィート	よんへいほう
ごフラン	ごフィート	ごへいほう
ろくフラン	ろくフィート	ろくへいほう
ななフラン	ななフィート	ななへいほう
はちフラン	はちフィート	はちへいほう
きゅうフラン	きゅうフィート	きゅうへいほう
<u>じゅっ</u> フラン	<u>じゅっ</u> フィート	<u>じゅう</u> へいほう
ひゃくフラン	ひゃくフィート	ひゃくへいほう
せんフラン	せんフィート	せんへいほう

/h/ ⁹⁾ で始まる外来語起源の助数詞が十の促音化を誘発する。一方、同じ /h/ で始まる助数詞でも、それが非外来語系の場合は、普通、下に挙げる C3 型の体系を示すが、「平方～」は、C2c に準じた読みを持つ。ただし、十については、「じゅっ」よりも「じゅう」が一般的であるため、C2c' として位置づける ¹⁰⁾。

外来語由来の助数詞には、/p-/ で始まるものがあるが、この助数詞の位置づけは単純には行かない。数詞一／八／十で促音化が現れたりすることから C2a のタイプであるように思われるが、数詞の六も促音化を起こすことがあることを考えると、基本が C2b であって、外来語であるために数詞が促音化しない読みが顕著に現れたにすぎないと考えられなくもない。

(9) いち／いっページ	いち／いっパーセント
⋮	⋮
ろく／ろっページ	ろく／ろっパーセント
⋮	⋮
はち／はっページ	はち／はっパーセント
じゅっページ	じゅっパーセント
ひゃくページ	ひゃくパーセント

しかし、この /p/ で始まる助数詞は、C2c の読みがもっとも「無難」だと思われる。従って、C2c を一応の基本型とし、一／八の促音化や場合によっては六でも促音化することがあるので、C2c" と分類しておきたい。ちなみに /p-/ の外来語助数詞が何故このような読みの変異を示すかについては、次に考察する C3c/d タイプの存在が影響しているのではないと思われる。すなわち、/p/ の原型はやはり C2c であり、十以外の数詞も促音化するのは、同じく促音化した数詞とともに /p/ の初頭音が用いられる C3c/d との類推で (9) のような読みが聞かれるのではないだろうかと言うことである¹¹⁾

異形態が利用される 2 つめの種類は、数詞と助数詞ともに読みの変化が観察されるものであり、これには 4 つの下位タイプがある。ただし、数詞と助数詞の読みが変わるといっても、必ずしも両方が同時に変わることを意味しているのではない。

(10) タイプ C3：数詞と助数詞の読みが変わる

a) <u>いっ</u> そく (足)	b) <u>いっ</u> かい (階)
にそく	にかい
さん <u>ぞく</u> なん <u>ぞく</u> ?	さん <u>がい</u> なん <u>がい</u> ?
よんそく	よんかい
ごそく	ごかい
ろくそく	<u>ろっ</u> かい
ななそく	ななかい
<u>はっ</u> そく	<u>はっ</u> かい／はちかい
きゅうそく	きゅうかい

<u>じゅっそく</u>	<u>じゅっかい</u>
ひゃくそく	<u>ひゃっかい</u>
<u>せんぞく</u>	<u>せんがい</u> (?)
c) <u>いっほん</u> (本)	d) <u>いっぶん</u> (分)
にほん	にぶん
<u>さんほん</u> なん <u>ほん</u> ?	<u>さんぶん</u> なん <u>ぶん</u> ?
よんほん	<u>よんぶん</u>
ごほん	ごぶん
<u>ろっほん</u>	<u>ろっぶん</u>
ななほん	ななぶん
<u>はっほん</u> ／はちほん	<u>はっぶん</u> ／はちぶん
きゅうほん	きゅうぶん
<u>じゅっほん</u>	<u>じゅっぶん</u>
<u>ひゃっほん</u>	<u>ひゃっぶん</u>
<u>せんほん</u>	<u>せんぶん</u>

最初の2つの下位タイプC3aとC3bは、先のC2aとC2bに類似しており、異なるのは、C3a/bで四以外の撥音で終わる数詞、つまり、三や千の後で助数詞の初頭音が濁音化する点である。この2つのタイプに属する助数詞は、その初頭音に関してもC2a/bと並行している。C3aタイプには/s/で始まる助数詞が、そして、C3bには/k/で始まるものが所属する。ただし、/t/で始まる助数詞でC3aの体系を示すものは現代語にはないようである。先に/h/で始まる外来語起源の助数詞はC2cに分類されると述べたが、非外来語系のものはC3cかC3dとして最も複雑な変化を呈する¹²⁾。この二者のタイプとも、いつくかの組合せで数詞と助数詞がともに読みを変え、一部の数詞との組合せにおいては、助数詞のみが基本と異なる読みを示す。両者の違いは、撥音で終わる数詞との結合に見られる。C3cの助数詞は、三と千の後で/h/が濁音化する。この点はC3a/bと同じである。一方のC3dでは、同じ環境で半濁音化した読みが現れ、さらに、上の「分」の例が示すように、四の後でも半濁音化している。

C3型の特徴として、まず、いずれの下位タイプにも外来語系の助数詞が見あ

たらないことが挙げられよう。外来語系の助数詞は、C1かC2ないしは次節で述べるJCに属する。また、C3の下位タイプは、撥音で終わる数詞との結合で読みが変わることも共通している。これに関して興味深いのは、数量を問う疑問詞「何」も「なん」と読まれ、撥音で終わる数詞と同じように振る舞い、C3型の助数詞がこれと結合すると、(半)濁音化した読みが用いられることである(例(10)を参照)。「『三』で読みが変わるときは、『何』でもその読みが使われる」という規則を知ることによって、不要な丸暗記の労力を省くことができるにもかかわらず、この些細であるが利用価値の高い情報が日本語学習者へ提供されているようにはみえない。

C3型については、注意すべき点がひとつある。読みの揺れが特に目立って観察されるのが、このタイプなのである。しかし、助数詞の基本形として上のC1からC3を認めると、この揺れの中に一つの一般的な傾向が見えてくる。すなわち、助数詞には基本の読みを維持しようとする平準化(leveling)の傾向がある¹³⁾。この傾向は、助数詞の読みのみが変わる組み合わせにおいてよく現れ、特にC3aとC3bにおいて顕著である。その結果、両者は各々C2aとC2bとしても使用される¹⁴⁾。

(11) a. C3a⇒C2a

さんぞく／さんそく (3足)、なんぞく／なんそく (何足)

b. C3b⇒C2b

さんがい／さんかい (3階)、なんがい／なんかい (何階)

また、C3dに関しては、上の(10)で挙げた「分」のように四も助数詞の半濁音化を引き起こしている点が、他の下位タイプと違うが、この四の後でも基本の読みが用いられる率が高いことが田野村(1990)のデータによっても例証されている¹⁵⁾。

(12) a. 3 泊：さんばく (99%)、さんはく (1%)

4 泊：よんばく (55%)、よんはく (45%)

何泊：なんばく (93%)、なんはく (2%)

b. 3 発：さんばつ (99%)、さんはつ (1%)

4 発：よんばつ (63%)、よんはつ (37%)

何発：なんぱつ (94%)、なんはつ (6%)

7,000 発：ななせんぱつ (92%)、ななせんはつ (3%)、なんせんぱつ (5%)

70,000 発：ななまんぱつ (74%)、ななまんはつ (22%)、ななまんぱつ (4%)

(12) b. の「発」を見ると、数字の大きい「万」の後で基本の読みの使用率が高く、「千」と「万」では、「ぱつ」という読みさえ現れている。現実には、大きい数字がそれほど頻繁に使用されないことから、揺れの原因のひとつとして使用頻度の低さが関わっている可能性を示唆しており興味深い。「ぱつ」という誤った(?)読みも、使い/聞き慣れていないことから生じた形式だと推測できる¹⁶⁾。

2. 3 和語系数詞と組む助数詞

この類の助数詞の分類の基準は、和語系数詞とのみ結合するか、それとも和語系以外に漢語系の数詞とも結合するかである。前者のタイプに属する助数詞は少ない。

(13) タイプJ：和語系数詞とのみ結合¹⁷⁾

ひとつ		ひとつき (1月)	ひとり (1人)
ふたつ	ふつか (2日)	ふたつき	ふたり
みっつ	みっか	みつき	
よっつ	よっか	よつき	
いつつ	いつか		
むっつ	むいか		
ななつ	なのか		
やっつ	<u>よう</u> か		
ここのつ	ここのか		
とお	とおか		
いくつ?			

タイプJの助数詞では、組合わさる数詞の読みの変化も変則的で、不規則とし

て取り扱っても構わないぐらいである。これらの助数詞で不足する数詞との組み合わせは、漢語系数詞と組む別の助数詞によって補われる。

- (14) a. じゅういっこ (個)、じゅうにこ; にじゅっこ
 b. いちにち (日); じゅういちにち、じゅうににち、さんじゅうにち
 ※ついたち; じゅうよっか; にじゅうよっか; はつか
 c. ごかげつ (ヶ月); じゅっかげつ、じゅういっかげつ
 d. さんにん (人)、よにん; じゅうにん、じゅういちにん

「か」と「り」は、各々「にち」と「にん」とともに数詞の組合せが相補分布を成している。つまり、「か」／「り」と組む数字に「にち」／「にん」は後続しない。

- (15) a. 2日 (○) ふつか (×) ににち
 b. 12日 (×) じゅうふつか (○) じゅうににち
 c. 1人 (○) ひとり (×) いちにん
 d. 11人 (×) じゅうひとり (○) じゅういちにん

「か」と「にち」そして「り」と「にん」は、それぞれ別々の助数詞とするよりも、形態的に条件づけられた異形態であると考え、一つの助数詞としてまとめて扱うこともできる。日本語学習という面からは、その方が実用的であろう。一方、「つ」と「つき」については、不足する数字で「こ」と「かげつ」によって補われるだけでなく、両者は併用される。

- (16) a. ひとつ／いっこ、ふたつ／にこ; いくつ／なんこ
 b. ひとつき／いっかげつ、ふたつき／にかげつ

和語系数詞と結合する助数詞の多くは、次のJC型に属する。このタイプでは、小さい数との組み合わせにおいてのみ和語系数詞が用いられる。

- (17) タイプJC: 和語系数詞に加え漢語系数詞とも結合

ひとへや (1部屋)

ひとたば (1束)

ふたへや

ふたたば

みへや

みたば／さんたば

よへや／よんへや

よんたば

ごへや

ごたば

ろくへや	ろくたば
ななへや	ななたば
はちへや	はったば / はちたば
きゅうへや	きゅうたば
じゅうへや	じゅうたば
いくへや? / なんへや?	なんたば?

漢語系数詞と組合わさるときは、2. 2で考察した助数詞と同じような読みの変化が観察される。例えば、「束」は、漢語系数詞との結合でC2aとして振る舞い、JC2aとタイプ付けすることができる。

JC型には、普通の名詞が助数詞と機能しているものが多く、外来語の中にもこのタイプに属するものが少なくない。

(18) ひとチーム	ひとクラス
ふたチーム	ふたクラス
さんチーム	さんクラス
よんチーム	よんクラス
ごチーム	ごクラス
ろくチーム	ろっクラス
はち / はっチーム	はっ / はちクラス
きゅうチーム	きゅうクラス
じゅうチーム	じゅうクラス

また、外来語や漢語起源のものは、小さい数字で漢語系数詞も併用されることが多い。「クラス」は(J)C2b'、そして「種類」は(J)C2aとしてタイプ付けすることができる。

(19) ひとクラス / いちクラス	ひとしゅるい / いっしゅるい (種類)
ふたクラス / にクラス	ふたしゅるい / にしゅるい
さんクラス	さんしゅるい
⋮	⋮
ろっクラス	ろくしゅるい
⋮	⋮

はち／はっクラス

⋮

はっしゅるい

⋮

JC型の助数詞にとって問題になるのは、「小さい数」とはいくつまでかが、助数詞ごとに異なっていたり、現実の使用にも揺れがあったりするため、どの数字まで和語系数詞が現れるかを特定するのが難しいことである。ただ、多くの場合、3と4において漢語系数詞が併用され、5以上の数字になると漢語系が用いられ出すようなので、初期の学習段階では、1と2（と3）で和語系数詞を使うとしておくのが一つの方策ではないかと思われる。

以上、日本語の助数詞をその形態的側面をもとに分類した。特に、形態変化が問題となる漢語系数詞との組み合わせにおいては、異形態＝「読みの変化」としてどのようなものがあり得るかを振り返ってみると、それが非常に限られていることがわかる。

(20) A. 「ち」（七を除く）／「く」で終わる数詞と十の末尾が促音化する

B. 撥音で終わる数詞の後で助数詞の初頭音が（半）濁音化する

C. 促音化した数詞の後で助数詞の初頭音が半濁音化する

また、数詞と助数詞のどちらの読みが変わるかという基準を出発点として、段階的に下位分類を行った。実際の出発点となるのは、1) 数詞と助数詞の両方も基本の読みのまま、2) 数詞の読みのみが変わるもの、3) 数詞と助数詞の両方の読みが変わるもの、という3つしかなく、論理的には考えられる「助数詞の読みのみが変わるもの」という第4の部類は存在しないようである。次に2)と3)の下位分類については、C2a/bとC3a/bのように変化の体系の並行性をタイプの名称に反映させるようにした。このようにすることで、「タイプ1、タイプ2…」や「タイプA、タイプB…」などと全て同列で位置づけた名称ではわからない、読みの変化の可能な体系とそれぞれのタイプ間の類似点・相違点が想起しやすくなる。さらに、和語系数詞と漢語系数詞が併用される助数詞に対しても、JC2bのように簡潔に特徴づけることができる。確かに読みの変化は、田野村（1990）での調査が示しているように、現実には揺れがある。ここで提案した分類ではその揺れをカバーするに十分ではなく、(20)のような潜在規則も原則的な類のものにすぎないかもしれない。しかし、本稿で提示したものは大

枠の分類であるにせよ、潜在的な読みのパターンを体系化したものであり、個々の読みを羅列するだけでは得られない有用な情報を提供している。このような助数詞の分類は、日本語文法の必修の事項であり、場面ごとに重要なポイントを際立たせ、学習者の理解を促進させる基礎となるものである。

3. 助数詞がもつ2つの基本概念

英語等を学習する際、数詞に関しては、各々について2つの単語を覚えなければならない。

(21) a. one, two, three, four,....., twenty,....., hundred.....

b. first, second, third, fourth,....., twentieth,....., hundredth.....

(21) a. と b. は、それぞれ基数詞 (cardinal)、序数詞 (ordinal) と呼ばれるものである。一方、日本語の数詞自体にこのような形態上の区別は存在しない。日本語で序数詞を表現したいときは、「～め」(や「第～」)を利用し、教科書などにおいてもそのように教えられる。

(22) 1年→1年め、2冊→2冊め、3本→3本め.....

しかし、「序数詞表現」イコール「～め」という単純な図式では助数詞の現実を捉えていないと言わざるを得ない。たとえば、"the third floor" の意で「3階め」とは言わない。このように「～め」が使えない助数詞もある。では、どうして「3階め」はおかしいのであろうか。

3. 1 基数概念と序数概念

大半の助数詞は、数詞と組合わさって「数量」を表現するが、中には数詞との組合せだけで「順序」を表現するものもある。この数量を表す「基数概念」と順序を表す「序数概念」の基本的区分については、教科書・学習書はもとより、形態変化については詳細に記述している辞書や文法書などでもあまり触れられていない¹⁸⁾。この2つの概念をもう少し分かりやすくいうと、2以上の数詞との組み合わせにおいて、基数概念は「複数概念」を、序数概念は「単数概念」を表現すると言ってもよいだろう¹⁹⁾。

(23) a. 基数概念: 2冊 "two books"、3人 "three persons"

b. 序数概念: 2等 "second class"、3番線 "Track Three"

いくつかの助数詞を取り上げて、個々の助数詞がどの概念を表現しているかを例示すると次のようになる。

(24)	基数概念	序数概念
-回	✓	
-本	✓	
-枚	✓	
-冊	✓	
-人	✓	
-週間	✓	
-番		✓
-号		✓
-等		✓
-階	✓	✓
-分 (ふん)	✓	✓
-日	✓	✓
-年	✓	✓

表からわかるように、助数詞は1) 基数概念のみ、2) 序数概念のみ、3) 基数概念と序数概念の両方、を表す3種類がある。最後の3)の助数詞においては、ふつう両概念を形態的に区別することはないが、次のようにそれぞれの概念を分担しているような助数詞のペアもある。

(25)	基数概念	序数概念
<div style="display: inline-block; vertical-align: middle;"> <div style="display: inline-block; width: 0; height: 0; border-left: 10px solid transparent; border-right: 10px solid transparent; border-bottom: 20px solid black; margin-right: 5px;"></div> <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;"> -時間 -時 </div> </div>	✓	✓
<div style="display: inline-block; vertical-align: middle;"> <div style="display: inline-block; width: 0; height: 0; border-left: 10px solid transparent; border-right: 10px solid transparent; border-bottom: 20px solid black; margin-right: 5px;"></div> <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;"> -ヶ月 -月 (がつ) </div> </div>	✓	✓

また、「日」については、数詞1と結合した場合のみ、「いちにち」と「私たち」の2つの言い回しを持ち、前者が基数概念=日数、後者が序数概念=日付を表す。文法書などの中には、この2つの概念の存在について言及している

ものも確かにある。しかし、基数概念しか持たない助数詞が数の上で多数を占めているにもかかわらず、両概念が形態上明確に区分されない点を強調するあまり、あたかもすべての助数詞が両方の概念を備えているような印象を与えてしまう記述があることは不適切だと言わざるを得ない。

次節において、この基数概念と序数概念が単に助数詞内部での問題に留まらないことを、この2つの違いが反映された文法事項を指摘することによって示そう。

3. 2 助数詞の基本概念と文法

先に「3階め」という表現がおかしいと述べたが、基数概念と序数概念の有無が助数詞ごとに異なることを念頭におけば、このおかしさに対して説明を与えることができる。「～め」は、順序表現を作る接尾辞であるが、基本的にそれが付加できるのは、序数概念を持たない助数詞のみである。

(26)	基数概念	序数概念	～め
-回	✓		○
-枚	✓		○
-人	✓		○
-時間	✓		○
-時		✓	
-号		✓	
-等		✓	
-階	✓	✓	
-分	✓	✓	

(26) で○の印は「～め」が後続できることを示すが、序数概念の欠如と○が共起しているのがわかる。確かに多くの助数詞は基数概念を表すので、「～め」を付けると序数表現になるという記述は、一見成立しそうに見える。しかし、序数概念をもつ助数詞も存在し、そのような助数詞にとっては、「～め」というのは必要ない。「階」という助数詞は、基数概念と序数概念を兼有している。従って、「3階」はそれだけで"three floors"と"third floor"の両方を表現することが

でき、「～め」を付けることは余剰的なのである。

ところが、他の助数詞を見ると、状況がそれほど単純でないことがわかる。下の (27) に示したように、「～め」の後続の可否と序数概念の有無を見比べてみると、序数概念を持つにもかかわらず、「～め」を許容するものがある。

(27)	基数概念	序数概念	～め
- 番		✓	○
- 日	✓	✓	○
- 年	✓	✓	○

(28) a. 2 番 "No. 2" → 2 番め

b. 3 日 "three days; third day" → 3 日め

「番」や「日」がすでに序数概念を持っているにもかかわらず、「2 番め」や「3 日め」という言い回しは全く問題ない。「3 階め」がおかしいのは、この助数詞が序数概念と基数概念の両方を有するからであるというのは、理由にならない。なぜならば、「日」や「年」も「階」と同様に概念を2つとも持っていて、「～め」を許しているからである。しかし、ここで序数概念として意図している「3 日」の意味と「3 日め」の意味を比較すると、両者が同じ意味でないことに気付く。「3 日」の序数概念つまり単数概念としての用法は、「～月3日」という暦の中のある特定の日付を指している。それに対して、「3 日め」という表現は、ある日を基準にして、そこから数えて3 番めの日のことであり、それは「5月8日」でも「12月2日」でもよい。つまり、「3 日」というのは、特定の序列にもとづいて名付けていった場合の、3 番めの日に与えられた「名前」なのである。いわば、絶対的・固有的・静的な名称である。対して、「3 日め」という表現は、個々の場面で任意の日を基準として数え上げていった際に3 番めに当たる日という意味で、相対的・一時的・動的なものであると言えよう。(28) a. の「2 番」と「2 番め」もその違いは微妙であるが、同様に解釈できる。さらに言えば、「3 階め」を「地上から3 番目の階」＝「3 階」という絶対的な名称としては使えないが、「3 日め」と同じように「ある階から数えて3 階め」という相対的な用法が想像できるような場面では可能であろう。「号」や「等」に「～め」を付けた形が受け入れがたいのは、おそらく助数詞の意味内容が相対的

解釈と合わないためであろう。

このように、序数詞を作りたいときは「～め」を付ければよいというような単純な記述では、学習者が「3階め」などの不適切な表現を作り出すことを防げることができず、どうしておかしいのか、また、どの序数詞では必要で、どの序数詞では必要ないのかを説明するためには、基数(複数)概念と序数(単数)概念の区分を導入する必要がある。

もう一つ、基数概念と序数概念の違いが反映されている文法事項を取り上げよう。日本語学や言語学で数量詞遊離(quantifier floating)と呼ばれる現象がある。

(29) a. 3人の学生が昨日欠席した。→ 学生が昨日3人欠席した。

b. 学生が3冊の本を買った。→ 学生が本を3冊買った。

図式化して表せば、次のようになる。

(30) a. [数詞+助数詞] の [名詞] [助詞]

ex. 3人の学生が

b. [名詞] [助詞] [数詞+助数詞]

ex. 学生が... 3人

これは、「数詞+助数詞」という表現が本来の修飾対象である名詞から外れて「遊離」しているものである。この構文が注目されるのは、助数詞表現が遊離できない場合が存在するからである。そして、遊離の可能性をめぐり、その要因は何であるかを発見しようといろいろな議論がなされている。そこでは、修飾対象である名詞の役割や名詞と数量詞との構造的関係が鍵であるとする論が中心で、理論的観点からの考察が多い。「数量詞遊離」という名称から、(30) a. が基本形で、(30) b. がその派生形であるとする考え方が窺われるが、現実には、後者の方がより自然な言い回しとして用いられることが多い。従って、日本語教育においては、「遊離」した表現が特有であることに加え、より自然な形式であることを考えると、学習者がそれに慣れるよう練習させることが大切である²⁰⁾。その際には、どのような場合に(30) b. の形式が不適切になるかを知っておく必要がある。適否を左右する要因はいくつかあるが²¹⁾、ここでは先に提示した助数詞の持つ概念もそのひとつであることを指摘する。

数量詞遊離とは、その名が示す通り、「数量」詞が名詞から離れたところに位置する構文である。数量を意味するものなら、すべて遊離可能とは限らないが、

少なくともそれは数量表現でなければならない。ところで、助数詞は基数概念と序数概念を持ち得るが、数量を表すのは前者の概念である。すなわち、基数概念を持たず、序数概念のみを備えている助数詞は、2以上の数詞と組んでも単数概念しか表さないの、数量を述べたものではない。従って、そのような助数詞は、(30) b. のような数量詞が名詞から遊離した表現形式をそもそも作り得ないのである²²⁾。

- (31) a. 24 番の選手を ... → * 選手を 24 番 ...
 b. 2 等の作品を ... → * 作品を 2 等 ...
 c. 5 階のフロアを ... → * フロアを 5 階 ...
 d. 6 日の日付を ... → * 日付を 6 日 ...

しかしながら、基数概念と序数概念を兼備している助数詞の遊離構文が文法的な場合は、前者の「数量」としての解釈が許される。例えば、下の例が適切であると判断されるならば、それぞれ「3 階分」「3 日分」という解釈が可能であろう。

- (32) a. 彼の会社は、このビルのフロアを 3 階借りている。
 b. 都合により日付を 3 日早めた。

このように基数概念と序数概念の基本的な区別はいくつかの文法事項で重要な意義を持つ。単に概念の存在に言及するだけでなく、個々の助数詞がどちらの概念を備えているかを知ることが大切である。

4. まとめ

助数詞の分類をそれぞれのタイプの特徴とともにまとめておこう²³⁾。

- | | |
|-----------------------|--------------------|
| (33) 助数詞の分類 | 助数詞の初頭音 |
| C1 : 漢語系数詞 + 変化なし | /h, k, s, t, p/ 以外 |
| C1' : 四「よ」 | |
| C2 : 漢語系数詞 + 数詞が変化 | |
| C2a : 「-ち」と十が促音化 | /s/, /t/ |
| C2b : 「-ち」と「-く」と十が促音化 | /k/ |
| C2b' : 一「いち」が一般的 | |

C2c : 十が促音化 /h/ (外来語系)

C2c' : 十「じゅう」が一般的

C2c" : C2a/b も可 /p/

C3 : 漢語系数詞 + 数詞と助数詞が変化

C3a : 「-ち」と十が促音化 /s/

「-ん」の後で助数詞が濁音化

C3b : 「-ち」と「-く」と十が促音化 /k/

「-ん」の後で助数詞が濁音化

C3c : 「-ち」と「-く」と十が促音化 /h/

「-ん」の後で助数詞が濁音化

促音化した数詞の後で助数詞が半濁音化

C3d : 「-ち」と「-く」と十が促音化 /h/

「-ん」と四の後で助数詞が半濁音化

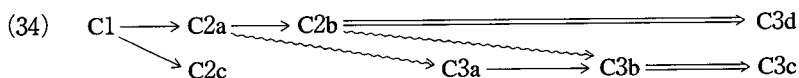
促音化した数詞の後で助数詞が半濁音化

J : 和語系数詞とのみ結合

JC ~ : 和語系数詞 + 漢語系数詞 (排他的)

(J)C ~ : 和語系数詞 + 漢語系数詞 (併用)

漢語系数詞と結合する助数詞のタイプの間には、次のような変化の関係をいふことができる。(34)において、「→」は数詞の促音化、「→」は助数詞の濁音化、「⇒」は助数詞の半濁音化を表す。



最後に、いくつかの助数詞について、その形態的タイプと基数概念/序数概念の有無を記した一覧表を付しておく。(タイプ名の後の「*」は何らかの変則性があることを示す。)

助数詞一覧表

助数詞	タイプ	基数	序数	備考
ban(番)	C1		✓	
ban(晩)	JC1	✓		

doru(ﾄﾞﾙ)	C1	✓		
en(円)	C1'	✓		
eki(駅)	JC1	✓		
fiito(フィート)	C2c	✓		
gatu(月)	C1*	✓		しがつ、しちがつ、くがつ
goositu(号室)	C1		✓	
hai(杯)	C3c	✓		
hako(箱)	JC3c/d	✓		
hatu(発)	C3d	✓		
heya(部屋)	JC2c	✓		
heehoo-(平方)	C2c'			
hekutaaru(ヘクター)	C2c'	✓		
hiki(匹)	C3c	✓		
ho(歩)	C3d	✓		
hon(本)	C3c	✓		
hun(分)	C3d	✓	✓	
hyaku(百)	C3c			
hyoo(票)	C3d*	✓		さんびょう/びょう、よんびょう/びょう etc.
ka(課)	C2b	✓	✓	
ka(日)	J	✓	✓	& niti、じゅうよつか、はつか etc.
kabu(株)	JC2b	✓		
kagetu(ヶ月)	C2b	✓		cf. tuki(月)
kai(回)	C2b	✓	(✓)	"inning"の意は序数概念もあり
kai(階)	C3b	✓	✓	
karorii(カリリー)	C2b'	✓		
keesu(ケース)	(J)C2b	✓		
ken(軒)	C3b	✓		
keta(桁)	JC2b	✓		
kiro(キロ)	C2b'	✓		
ko(個)	C2b	✓		cf. tu(つ)
kairi(海里)	C2b'	✓		
kumi(組)	JC2b	✓	(✓)	「2年1組」などは序数概念でC2b
kurasu(クラス)	(J)C2b'	✓		
mai(枚)	C1	✓		
man(万)	C1			
mune(棟)	JC1	✓		
nen(年)	C1'	✓	✓	序数概念: ex. 西暦1997年
nin(人)	C1*	✓		& ri「ひとり、ふたり」以外
ninmae(人前)	C1'	✓		いちにんまえ、ににんまえ
niti(日)	C1*	✓	✓	& ka、(基数)いちにち、(序数)ついたち
pakku(パック)	(J)C2c"	✓		
peezi(ページ)	C2c"	✓	✓	
ri(人)	J	✓		& nin「ひとり、ふたり」のみ
rippoo-(立方)	C1			
sai(才)	C2a	✓		20才「はたち」
sara(皿)	JC2a	✓		
satu(冊)	C2a	✓		

seeki(世紀)	C2a	✓	✓	
sen(千)	C3a			
soku(足)	C3a	✓		
syurui(種類)	(I)C2a	✓		
too(頭)	C2a	✓		
toori(通り)	JC2a	✓		
tu(つ)	J	✓		& ko
tubo(坪)	JC2a	✓		
tuki(月)	J	✓		& kagetu
tyoo(兆)	C2a			
wa(羽)	C3c(C1)*	✓		さんば／わ、よんわ／ば、じゅうわ／じゅっぱ etc.
wari(割)	C1	✓		
zi(時)	C1*	✓		くじ
zikan(時間)	C1*	✓		くじかん

注

- 1) もちろん、辞書や文法書の中には、このような助数詞の読みの変化を整理してあるものもあるが、その方法がタイプ間の形態的關係を反映したものではなかったり、辞書では分類が細かすぎるのが普通で、必ずしも日本語教育に際してそのまま使用可能であるわけではない。
- 2) 田野村 (1990) は、助数詞の形態の整理に加え、「読み」に関する実態調査を行っており、その結果は現代日本語を反映した興味深いものである。本稿の分類もその調査結果に負うところが大きい。
- 3) 漢数字の「四」などは、一の位が「四」である二桁以上の数字を含んだものも示す。同様に「十」や「百」に関する記述は、「二十」や「二百」などにも当てはまる。
- 4) Cは、Chineseの略。
- 5) 原則的に「なな」の代わりとして「しち」も一般的に用いられるので、以下では特に必要がある場合を除き「しち」という読みには言及しない。
- 6) 10「じゅっ」の他に「じっ」という読みもあるが、あまり聞かれなくなっているようである。
- 7) 七の「しち」という読みは、促音化しない。
- 8) 外来語以外でも「海里」「光年」などでは、一が促音化しない。
- 9) 「ファ、フィ、フェ、フォ」を含む。
- 10) 外来語の「ヘクター」もC2c'のタイプである。
- 11) これは推測にしかすぎない。ただ、もし、本当にこの類推という機構が働いているとするならば、外来語由来の助数詞は、外来がC1なしはC2cのはずが、同じ初頭音をもつ漢語系・和語系の助数詞の音変化をモデルとして、それと同じタイプの読みを用いているという想定さえもできるかもしれない。もしそうならば、C2型であ

るとされる外来語の助数詞で数詞の促音化しない読みがよく聞かれることにもひとつの説明を与えることが可能である。

- 12) 先に挙げた「平方」などは別で、これは漢語系であるが、C2c'。
- 13) 数詞の方でも C2b で、「はっ」とともに「はち」が併用されるのも同じことである。C3c/d で「はっ」が「はち」となると助数詞の方も基本の読みに戻る。
- 14) もともと、C3a/b に所属する助数詞は現代語では非常に少なく、そのほとんどが C2a/b タイプの変化を許容する。その中でも「～千」は、C3a としての変化を固持している。
- 15) 半濁音の形式がかなり一般的な「四分」でも「よんぶん」という読みを載せている教科書もある。
- 16) 同様に、「1,000 階」の読みが「せんかい」か「せんがい」かは選べそうにない。
- 17) J は、Japanese の略。
- 18) Jordan & Noda (1987-1990) は、この 2 つの概念を用法の違いとして区別し、助数詞の一覧表に加えている。また、Vance (1993) も、Jordan & Noda (ibid.) を参考に同様の区別を助数詞リストに付記している。
- 19) 「基数概念」や「序数概念」は、英語などの言語で一般的に基数詞、序数詞を用いた表現に対応することから名付けたものである。後者の概念には、順序の意味合いが日本語でもあるが、中には「序数」という呼び名が適当かどうか疑わしいものや (23) b. の "Track Three" などのように英語などでも序数詞を用いない表現に対応することもあるので、「複数概念」「単数概念」の方がいいかも知れない。ただ、複数概念でも数字が 1 のときは、もちろん単数を表すので、「基数概念・序数概念」という呼び名を使うことにする。
- 20) もちろん、(30) の a. と b. で意味が大きく異なる場合もあるので、前者の表現方法を無視していいわけではない。
- 21) 一般的な要因としては 2 種類あるようである。まず、名詞自体の地位が関わっている場合：

(i) * 学生に 3 人課題を与えた

* 学生に課題を 3 人与えた。

主語や目的語ないしはガ格名詞やヲ格名詞以外では不適切になりやすいようである。

次に、数量詞と名詞との意味的関係が関わっている場合：

(ii) 本を百ページ読んだ

* 本を百ページ買った。 ← 百ページの本を買った。

数量詞が修飾対象の名詞の数量でなく属性を意味するときなどは、遊離できないようである。

- 22) (31) のような形式が不可能であるのは、助数詞が基数概念を表していないからで

あるが、これは、注21)で触れたように助数詞表現自体が数量を表すものであっても、修飾対象の名詞自体の数量を意味しない時に遊離構文が不可能であるのと同一線上にあるように思われる。

- 23) 「-ち」は一と八、「-く」は六と百、「-ん」は四以外の撥音で終わる数詞(「何」を含む)をそれぞれ表す。

参考文献

- 文化庁 (1990) 『外国人のための基本語用例辞典 (第三版)』 東京: 大蔵省印刷局。
 平山輝男編 (1960) 『全国アクセント辞典』 東京: 東京堂出版。
 Jordan, E. H. & M. Noda (1987-1990) *Japanese: The Spoken Language*. Tokyo: Kodansha International.
 Makino, S. & M. Tsutsui (1989) *A Dictionary of Basic Japanese Grammar*. Tokyo: The Japan Times.
 Makino, S. & M. Tsutsui (1995) *A Dictionary of Intermediate Japanese Grammar*. Tokyo: The Japan Times.
 Miyagawa, S. (1989) *Structure and Case Marking in Japanese*. London: Academic Press.
 NHK編 (1985) 『日本語発音アクセント辞典』 東京: 日本放送出版協会。
 日本語教育学会編 (1982) 『日本語教育事典』 東京: 大修館書店。
 田野村忠温 (1990) 「現代日本語の数詞と助数詞—形態の整理と実態調査」『奈良大学紀要』第18号, 194-216。
 Vance, T. J. (1993) *Kodansha's Romanized Japanese-English Dictionary*. Tokyo: Kodansha International.

<キーワード> 助数詞, 形態分類, 基数概念, 序数概念

On the Japanese Counters

— Classification and Two General Meanings —

Yasuhiro KISHIDA

This paper is concerned with the so-called counters in Japanese, in particular, morphological and semantic aspects of counters which are indispensable not only to Japanese grammar but also to the learning of the language.

First, an alternative classification of counters is presented based on the way in which their morphology changes. Although the variations in reading which counters and/or numerals exhibit when they are combined seem rather complicated at first, the counters can be grouped into a small number of types according to a basic pattern of changes. A hierarchical classification is proposed reflecting a morphological system inherent in the counters. This kind of classification system also enables the recognition of the similarities and differences between counter types, which may have been obscured in the "flat" classifications proposed so far.

Secondly, it is pointed out that Japanese counters can provide either one or both of two distinct meanings which are referred to as "cardinal" and "ordinal" in this paper. Since it seems that little attention has been given to this semantic aspect of Japanese counters, two concrete examples will be discussed where the classification into "cardinal" and "ordinal" plays an important role. It is concluded that such a classification should be included in explicit treatments of grammar as well as in language teaching.